『人文学報』第110号（2017年７月）
（京都大学人文科学研究所）

南アジア地域経済圏におけるイースタン・バンクの「関所資本主義」（1860〜90年）

川　村　朋　貴*

は　じ　め　に

1850年代・60年代につぎつぎと設立された「イースタン・バンク」は，イギリスのほか，アジア各地に店舗を構え，とりわけ外国為替取引から生じる莫大な利益の獲得にしのぎを削った。ここでいうイースタン・バンクとは，オリエンタル銀行，チャータード銀行，マーカンタイル銀行，香港上海銀行など，アジア市場向けの英系国際銀行群のことである。本稿の目的は，登場したばかりでよちよち歩きのイースタン・バンクが，なぜ，どのように急成長しえたのかという点を，南アジア地域経済圏の変動と結びつけながら考察することである。

ところで，フェルナン・ブローデルによると，「資本主義」とは，透明な交換経済である「市場経済」とまったく異なる不透明かつ不公平な交換によって生じ，世界各地の諸市場間を接続する交通・輸送の要所で形成される利潤独占の世界から発展した[1)]。安富歩は，このブローデルの資本主義史論に依拠し，そうしたコミュニケーションのボトルネックを占拠・管理することによって，「市場経済」の領域で生きる人びとから膨大な「通行料」を搾取する少数者たちの独占ビジネスを，「関所資本主義」と呼んだ[2)]。彼らは高利潤の源泉となる「関所」を構築することで自由競争を排除し，「資本主義」の世界を牛耳ったのである。安富は，ヒト・モノ・カネ・情報の流れやつながりを独占する高度な関所ビジネスの代表例として，とりわけ銀行業務の関所効果に注目する。こうしたブローデルや安富の議論から，イースタン・バンクの関所的機能のみならず，ネットワークの結節点の意味を問うことの重要性が浮上する。それゆえに，本稿で考察すべき問題は，イースタン・バンクの立地場所とそこでの機能と役割，さらに突き詰めれば，銀行そのものの存在意義なのである。

本稿の関心は，それだけにとどまらない。イースタン・バンクの発展過程は，ヨーロッパの

* かわむら　ともたか　東京大学学術支援職員

経済変動という文脈から説明されるのが一般的である[3]。しかし，アジア市場を主戦場にしたイースタン・バンクへの接近には，よりバランスの取れた見方が必要なのであり，実際に銀行店舗が配置された「場」やそれを取り巻く経済環境，換言すれば，ローカルあるいはリージョナルな経済構造の特徴とその変動を重視する文脈にも十分に配慮しなければならない。その意味で，イースタン・バンク活動の特徴は，一定の自立性を有した地域経済圏の存在を発見した「アジア間貿易」論と符合する部分が多く，特にその地域間貿易とシティ利害との補完関係に注目する見方[4]に結びつく。この見方は，「ヨーロッパとアジア」との接触の歴史的位相への接近可能性を示唆していると考えても，あながち的外れではないであろう。それゆえ，本稿では，イースタン・バンク史の視角から，19 世紀後半での「ヨーロッパとアジア」との交流史の一局面を論じ，両者の出会いの諸結果を明らかにしようと思う。

「ヨーロッパとアジア」の接触とその結果に関して，ラジャット・カンタ・レイは，19 世紀のインド洋周辺社会に注目し，そこに出現した三重経済構造（欧米資本主義領域の上層，「バザール」という中層，自給自足経済が広がっていた下層）を明示した[5]。レイが見事に浮かび上がらせた「バザール」とは，ヨーロッパ・グローバル資本とアジア系商人との「出会い」によって興隆した新たな経済空間であり，後者が支配した近代的信用活動の領域であった。このレイの近代バザール論は，水島司のアジア金融論と呼応し合う。水島は，ナットゥコッタイ・チェッティヤールのような「先発植民地出身の金融業者のネットワークがアジア＝アフリカ地域で果たした役割が，イギリスの世界的な植民地支配体制やパクス・ブリタニカの成立，維持，運営という近代史への複眼的志向を要請する」と強調する[6]。ただし，「アジアの金融業ネットワークと植民地金融ネットワークとの相互の関わりについては，今後の重要な課題」とし，それ以上，詳しく言及することはない。

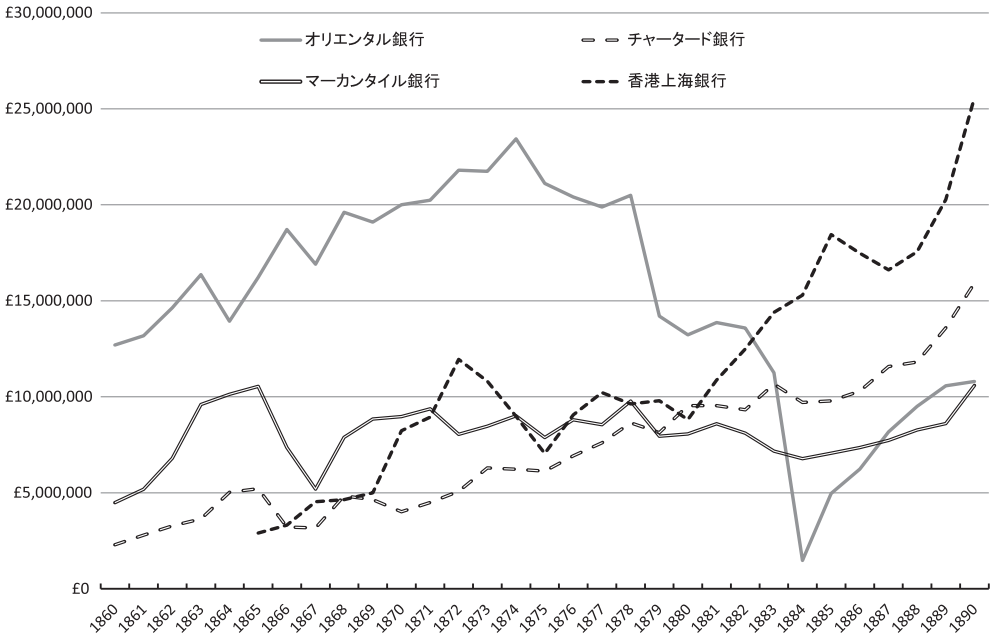
レイや水島の重要な議論を発展させるためには，アジア金融と植民地金融との相互関係に関する実証研究がさらに進められるべきだが，史料上の限界性も加味し，最新の銀行研究[7]でも不十分な部分であり，未だ検討の余地を多く残している研究分野だといえる。そこで，本稿では，マーカンタイル銀行史資料[8]を利用して，1870 年代以降に支店活動規模が大きかった南アジアとその周辺地域での同銀行活動の実態を明らかにする。具体的に取り上げる支店は，ボンベイ店，カルカッタ店，ラングーン店，ペナン店である。マーカンタイル銀行は，その「場」において日常的に誰と接触・交流し，どのような金融サーヴィスを提供することによって利潤を得，19 世紀後半のアジア経済・社会にいかなる結果をもたらしたのか。以上が本稿の課題である。

1　イースタン・バンクの勢力地図

営業成績の趨勢

（図表 1）は，公表された主要イースタン・バンクの営業規模比較表である。特に目立っている特徴は，1878 年頃まではオリエンタル銀行の営業展開が他行のそれよりも抜きん出ており，同行の圧倒的かつダイナミックな勢いを反映している点である。オリエンタル銀行は，1842 年にボンベイで創設された地方銀行に起源をもったが，本店をロンドンに移転した後，イギリス政府より「国王特許状」が付与され，喜望峰以東の諸地域での営業活動を認められた最初のロンドン株式銀行となった。「法人格」と「株主の有限責任」という特権を認める国王特許状の取得は，遠隔地間金融取引を保障する強大な「関所」の構築には必須条件であった。しかし，オリエンタル銀行は，セイロンや南アフリカでの損失と世界的な銀価下落によって，1875 年以降の営業成績を急激に悪化させ，最終的には 1884 年に支払い停止に陥った。

営業規模第二位は，1870 年までマーカンタイル銀行であった。同銀行は 1853 年にボンベイ



注：香港上海銀行の場合，公表された貸借対照表は香港ドルで示されている。ポンドから香港ドルへの換算率に関しては，西村閑也「香港上海銀行　1865-1913 年」西村閑也，鈴木俊夫，赤川元章編著『国際銀行とアジア　1870～1913』慶応義塾大学出版会，551 頁を用いた。

出典：*The Economist*: *or the Political, Commercial, Agricultural, and Free-trade Journal.*

図表 1　主要イースタン・バンクの営業規模（資産＝負債額）比較

で創業し，1857 年にロンドンに本店を移転し，すぐに国王特許状を取得した。（図表 1）でも示されるように，1870 年代において，マーカンタイル銀行は，香港上海銀行やチャータード銀行と激しい競争を展開した。とりわけ，1865 年に創業してから 10 年にも満たない香港上海銀行の営業成績が 1869 年から 1872 年にかけて上昇し，それ以降，先発銀行であるチャータード銀行やマーカンタイル銀行よりも拡大していたのは興味深い。

チャータード銀行の営業成績を全体的に見ると，相対的に控えめな推移であるが，他行の営業がかなり不安定であった 1870 年代でも，着実に上昇傾向であった。1879 年からオリエンタル銀行の営業成績が急激に下降する一方で，香港上海銀行が一気に頭角を現している。マーカンタイル銀行の経営も厳しい状況に直面し，1884 年以降，チャータード銀行が第二位の営業規模を誇るようになった。イースタン・バンクの勢力地図が完全に変容したのが，見てとれよう。

「関所」の配置場所

（図表 2）は，当該期の主要イースタン・バンクの店舗配置を示している。これを見ると，各銀行の店舗集中場所にはそれぞれ独自の特徴があることに気づき，その銀行の成り立ちや経営戦略が垣間見られると同時に，アジア内の地域間連携を構築する最も重要な貿易・金融上の中心地も把握できるように思われる。久末亮一は，香港という「場」を，単に中継港と表現するのではなく，ヒト・モノ・カネ・情報のつながりや流れを集散・調節・接続する役割をもつ「ゲートウェイ」として再定義している[9]。イースタン・バンクの「関所」の立地場所は，まさにアジアのゲートウェイであったといえる。

オリエンタル銀行は，当該期前半のフロントランナーである。それは 1870 年までにインド，セイロン，モーリシャス，シンガポール，中国，日本，そしてオーストラリアへ進出し，15 の支店をもつメガ・バンクに成長した。1884 年 5 月に支払停止に陥ったオリエンタル銀行は，国王特許状の返上と減資・組織更生を行ない，二ヶ月後に再出発した。

これに続き，チャータード銀行とマーカンタイル銀行が，ロンドン本店と連結する支店網をアジア各地に拡げていった。チャータード銀行は，1852 年 10 月にロンドンで特許株式銀行として計画されたが，当初予定されていたオーストラリアへの進出を断念し，相対的に小規模で営業を開始した。しかし，同行はマドラス，セイロン，モーリシャスなどに店舗を設置しなかった分，1870 年初頭以降，ビルマや蘭領東インドでいち早く営業を始めるという独自の支店政策をとった。それは，マニラ（1872 年）とペナン（1875 年）にも新たに店舗を開設した。特にマニラには，ラングーンと同様に，主要銀行では一番乗りであった。そして，1880 年代においては，東南アジア，とりわけマレー半島と蘭領ジャワでの銀行活動を拡大させていったのである。

図表２　イースタン・バンク主要行の店舗配置

	オリエンタル銀行				チャータード銀行				マーカンタイル銀行				香港上海銀行		
	1861年	1870年	1880年	1890年	1861年	1870年	1880年	1890年	1861年	1870年	1880年	1890年	1870年	1880年	1890年
インド	カルカッタ ボンベイ マドラス	カルカッタ ボンベイ マドラス カラチ	カルカッタ ボンベイ マドラス	カルカッタ ボンベイ マドラス	カルカッタ ボンベイ	カルカッタ ボンベイ カラチ	カルカッタ ボンベイ カラチ アキャブ	カルカッタ ボンベイ アキャブ	カルカッタ ボンベイ マドラス	カルカッタ ボンベイ マドラス コカダナ	カルカッタ ボンベイ マドラス	カルカッタ ボンベイ マドラス	カルカッタ ボンベイ	カルカッタ ボンベイ	カルカッタ ボンベイ
セイロン	コロンボ	コロンボ カンディー	コロンボ ガール	コロンボ ガール バドゥッラ ジャフナ ヌワラ・エリヤ					コロンボ カンディー	コロンボ カンディー ガール	コロンボ カンディー ガール マータレー	コロンボ カンディー ガール			
東南アジア	シンガポール	シンガポール	シンガポール	シンガポール	シンガポール	シンガポール バタヴィア ラングーン シットウェ	シンガポール ペナン バタヴィア ラングーン マニラ	シンガポール ペナン クアランプール タイピン バタヴィア デリ スラバヤ ラングーン マニラ	シンガポール ペナン	シンガポール ペナン	シンガポール ペナン バタヴィア スラバヤ ラングーン	シンガポール ペナン マラッカ バタヴィア ラングーン	シンガポール バンコク サイゴン マニラ	シンガポール サイゴン マニラ	シンガポール ペナン バタヴィア サイゴン マニラ イロイロ
中国	香港 上海	香港 上海	香港 上海	香港 上海	香港 上海	香港 上海 漢口	香港 上海	香港 上海 福州 漢口	香港 上海	香港 上海 福州 漢口	香港 上海 福州	香港 上海	香港 上海 福州 厦門 寧波 包頭	香港 上海 福州 漢口 厦門 寧波 汕頭	香港 上海 福州 漢口 厦門 天津
日本		横浜 神戸	横浜 神戸				横浜	横浜		横浜			横浜 神戸	横浜 神戸	横浜 神戸
他のアジア	モーリシャス シドニー メルボルン	モーリシャス シドニー メルボルン													
欧米	ロンドン	ロンドン	ロンドン	ロンドン	ロンドン	ロンドン	ロンドン	ロンドン	ロンドン	ロンドン エディンバラ	ロンドン	ロンドン	ロンドン サンフランシスコ	ロンドン	ロンドン

出典：図表１と同じ。

マーカンタイル銀行は，1853年にボンベイで創設されて1年以内に，カルカッタ，コロンボ，香港，上海，ロンドンとつぎつぎに支店を開設した。（図表1）でも示したように，マーカンタイル銀行は，一時的にモーリシャスのポート・ルイス（1858～64年）や南インドのチュティコリン（1861～64年）にも支店を開設している。同行の支店政策にも大きな特徴があり，開業直後からセイロンでの活動に力を注いでいた。そこでは，オリエンタル銀行との競合となったが，セイロン最大の貿易都市であるコロンボのみならず，その後背地であるカンディー，ガール，ヌーワラ・エーリア（1861～64年），マータレー（1864～84年）にも積極的に店舗が開設された。1880年代になると，マーカンタイル銀行の東南アジアでの活動が目立ってくる。全銀行が支店を配置したシンガポール以外に，同行はペナンに最初に進出してはいたが，より活発な営業を行なうようになったのは1870年代後半であった。ただし，この東南アジアでは，いち早く事業を展開していたチャータード銀行との競合となった。

香港上海銀行は1864年に香港で計画され，翌年，香港政庁条例によって法人格と株主の有限責任制を認められた「地方銀行」である。香港上海銀行の設立趣意書には，同行の設立は香港，そして中国・日本の開港場で急拡大する外国・地方貿易への金融的便宜の供与を目的とすると明記されている[10)]。それを反映するように，香港上海銀行は店舗の立地場所を一貫して東アジアに集中させ，他の銀行が進出しない開港場にも進出する独特の支店政策を展開したことが，（図表1）から見て取れる。この点に関して，濱下武志の見解は非常に示唆的である。濱下は，香港上海銀行の支店政策を見ると，香港に本店を置いた香港上海銀行が支店を設けるうえでの立地条件は，華僑や印僑のようなアジア人商人たちが社会的にも経済的にもしっかり根付いたアジアのネットワーク都市であったというのである[11)]。東南アジアでは，同行は，香港との強い商業的つながりをもつフィリピン，シャム，仏領インドシナにも「関所」を拡大させていった。

2 「関所」の仕事

業務内容の特徴

イースタン・バンクの「関所」活動では，どのような仕事が行われていたのだろうか。西村閑也によると，国際銀行の重要な「支店」業務には，以下の2つが挙げられるという[12)]。

① 現地在住の欧米人に，輸出品集荷のための資金を貸し付け，また輸入品の在庫に金融をつけることによって，これらの商人のニーズに応えるとともに，輸入代金を欧米に送金をする必要のある輸入商に対して，自行ロンドン店払銀行為替手形を売却する業務。

② その代金として受け取った現地通貨で，輸出商が欧州向け輸出品を引当にして振り出した

図表３　イースタン・バンク主要行の貸借対照表（1880 年）

		オリエンタル銀行	チャータード銀行	マーカンタイル銀行	香港上海銀行
負債	資本金・準備金	£1,563,812	£990,000	£810,121	£1,211,009
	銀行券	£602,205	£389,923	£530,654	£356,946
	当座・定期預金	£8,286,219	£3,938,185	£3,788,996	£4,440,105
	支払手形	£2,328,069	£4,176,928	£2,052,228	£2,684,375
	その他	£445,378	£47,667	£886,638	£116,632
	負債計	£13,225,683	£9,542,703	£8,068,637	£8,809,067
資産	現金・ブリオン	£1,226,645	£2,220,519	£1,417,912	£1,180,989
	政府証券	£1,130,304	£223,829	£1,436,687	£24,804
	取立（買取）手形	£3,388,906	£5,425,303	£3,751,825	£5,190,625
	前貸・貸付他	£2,860,510	£1,593,779	£762,839	£2,348,583
	手形割引	£3,127,261		£253,530	
	その他	£1,278,978	£79,273	£445,844	£64,065
	資産計	£13,225,683	£9,542,703	£8,068,637	£8,809,067

注と出典：図表１と同じ。

ロンドン払手形を買い取り，それを自行のロンドン店に送って，輸出商に売却したロンドン店払銀行為替と相殺する業務。

この西村の説明は，アジアにおけるイースタン・バンクの営業資金の調達と運用を簡潔に表しているが，次に示す貸借対照表（図表３）と照合して考えると，より明確になるであろう。

（図表３）において，銀行の資金調達を表しているのは「負債」の部である。上記①の「自行ロンドン店払銀行為替手形を売却する業務」とは，「負債」部の「支払手形」として記載された。これは，特に輸入貿易商人に対するロンドン払手形の販売業務のことで，その代金として銀行は現地通貨を獲得（調達）することができた。すなわち，ロンドンやアジア各地の輸入貿易が拡大すれば，この「支払手形」の販売取引が活発となったのである。資金調達面では，「当座・定期預金」の吸収能力も銀行活動を左右するほど重要であり，「負債」部で最も大きな割合を占めていた。この預金はもちろん現地通貨で受領した。

このように調達された資金の運用活動は，部分的には上記②で説明され，（図表３）では「資産」部に表される。すなわち，アジア各地で為替手形を販売して得た「現地通貨で，輸出商が欧州向け輸出品を引当にして振り出したロンドン払手形」を買い取る取引は，「資産」部の「取立（買取）手形」として記載された。この為替取引は，どの銀行も例外なく，資金運用面で最も大きな割合を占めている。これは，主としてロンドンとアジア各地で行なわれた輸出貿易に金融的便宜を供与することによって利益を得ていたことを意味する。イースタン・バンクの資金運用には，上記①でいう「輸出品集荷のための資金を貸し付け，また輸入品の在庫に金融をつける」業務が含まれ，「資産」部の「前貸・貸付他」として表されている。さらに現

地通貨での「手形割引」も無視できないが，為替買取が最も重要な運用業務であった。イースタン・バンクが「東洋為替銀行」といわれた所以である。

世界貿易の趨勢

杉原薫は，1840 年と 1910 年の世界貿易の趨勢と構造変化を明らかにする。この推計は，各国の経済規模（GDP）や地域内交易額を組み込んで，19 世紀世界貿易の再構成を試みている点で画期的である[13]。この統計処理の方法により，真の意味でグローバルな視点に立って世界貿易を論じることが可能となるのである。杉原によれば，1840 年から 1910 年にかけての世界貿易は，世界貿易の拡大とその多角的貿易構造化を伴いながら，「欧米とアジアを両翼として出現したと概括されるべき趨勢であった」。

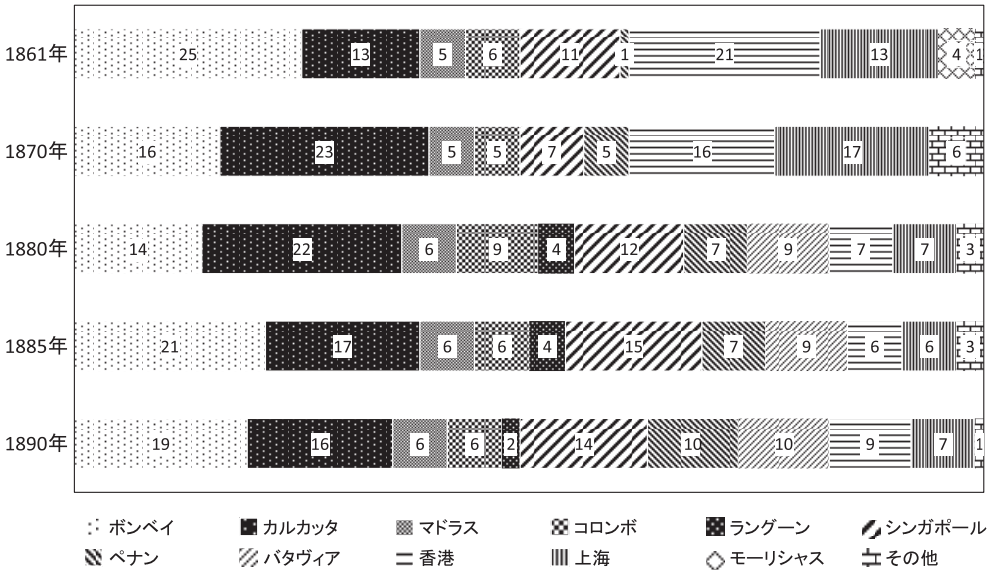
本稿の関心から注目すべき点は，当該期においてヨーロッパーアジア間の国際貿易が大きく拡大したことである。その総額は，1840 年では 4300 万ポンドであったが，1910 年には 2 億 2300 万ポンドであった。この背景には，ヨーロッパ諸国の工業化とその帝国主義的世界展開，スエズ運河の開通，さらには交通・通信の技術革新等が控えていたのはいうまでもない。この遠隔地貿易の規模が大きくなればなるほど，それに金融をつけたイースタン・バンクの成長が加速するのであった。

さらに興味深い特徴は，非ヨーロッパ全地域におけるアジアの経済規模（GDP 指標）と「地域交易比率」[14] の大きさである。世界 GDP の地域別構成において，1840 年のアジアの割合は 59.5% も占める一方，1913 年ではヨーロッパや北アメリカの比重が高くなった分，24.9% に下げているものの，その GDP 総額は緩慢ながら増大させている。他方，アジアの「地域交易比率」は，1840 年のアジア輸出全体の 70%，1910 年では 66.8% を占め，両時期のヨーロッパのそれとほぼ同じ比率であった。つまり，アジア貿易の発展が，遠隔地貿易と同時に（むしろそれ以上に），地域内交易の成長と深化によって促進されていたことを意味する。この「アジア間貿易」が，欧米諸国との遠隔地貿易と接触しながら第一次産品生産や在来産業の発展によって急速に成長し，域内で相対的自立性をもつ農工分業体制の確立に至らしめたのである[15]。

もしそうであるならば，アジア間貿易に絡んだ国際金融サーヴィスの提供も，遠隔地貿易の金融と同様に，イースタン・バンクの利益の源泉となったと考えても差し支えないであろう。イギリスやアジアの対外貿易が拡大すればするほど，イースタン・バンクの為替売買取引が増大し，その関所ビジネスの規模を巨大化させていったということができる。

マーカンタイル銀行のアジア店活動規模

資産負債表で示されるマーカンタイル銀行アジア各店の諸活動は，銀行全体の営業活動のな



出典：Statements of General Balance, MBH 2368, Chartered Mercantile Bank of India, London and China Archives, HSBC Group Archives.

図表 4　マーカンタイル銀行アジア店の活動規模比率

かでどのくらいの規模を有しているのだろうか。それを示すのが（図表 4）である[16]。最初に，同銀行が創業して 13 年後の 1861 年段階を見ると，ボンベイ店（25%），カルカッタ店（13%），香港店（21%），上海店（13%）の活動規模が大きかったのがわかる。シンガポール店のそれも全体の 1 割強を占めている。全体的にいえる重要な特徴は，前述の 5 店が東インド会社時代から支配的になっていたアヘン三角貿易の拠点であったという点である。インドや中国における銀行活動の規模の大きさがこの伝統的な貿易パターンを強く反映していたということは，容易に想像できよう。

マーカンタイル銀行は，インド洋交易圏に属する英領モーリシャス島のポート・ルイスにも支店を開設した。モーリシャスには，すでにオリエンタル銀行が 1852 年に支店を配置し，欧米諸国向けの砂糖の輸出貿易に絡んだ金融サーヴィスをほぼ独占的に提供していた。19 世紀半ばまでには，世界の甘蔗糖生産のうち約 8 % がこのモーリシャスのプランテーションで，インドからの年季契約労働者の苦役によって生産された[17]。オリエンタル銀行は，モーリシャスでの発券銀行の役割も担っていた。1859 年にマーカンタイル銀行は新規参入したのであったが，やはりオリエンタル銀行の営業地盤に食い込むことは難しく，1865 年末にモーリシャスから撤退することになった。

次に 1870 年の比率に目を移すと，その全体的な特徴は 1861 年のそれとほとんど変わりなく，インド（44%）と中国（34%）での銀行活動が依然として目立っている。しかし，本稿の関心

から特に注目すべき活動規模の拡大を示しているのは，ペナン店（1861 年開店）であろう。後述するように，ペナンの商業的繁栄はシンガポールのそれに多大な影響を受けると同時に，ベンガル湾に接する地域交易圏のなかでの独自の発展も経験したからである。

1880 年以降も一貫して，マーカンタイル銀行のインド活動（42%）は大きな規模を維持していた。そのなかではカルカッタ店の活動規模が最も大きく，その 50% 強を占めるほどであった。マドラスでの銀行活動は他 2 店と比較すると小規模で，そこでの限られた「パイ」をオリエンタル銀行と奪いあっているという状態であった。マーカンタイル銀行がかなり積極的に活動したのが，南インド地域とつながり深いセイロン島であった。しかし，モーリシャス島と同様に，ここでもオリエンタル銀行との競合であった。マーカンタイル銀行は，開業と同時にコロンボとカンディーに進出し，1863 年にガールにも店舗を開設した。コロンボ店の活動規模はマドラスのそれとほぼ同じで，1880 年代にも維持されている。コロンボ店は「資産」として「コーヒー園」を保有しており，その特産品の輸出貿易のみならず，生産商品や土地抵当を担保にしたプランテーション投資にも関わっていた。

しかし，マーカンタイル銀行のアジア展開に生じた大きな変化も看過できない。それは，中国での活動規模が縮小する反面で，東南アジアでのそれが拡大するという変化によって特徴づけられる。同行の東南アジア各店で目を引くのは蘭印のバタヴィア店であり，ペナン店よりも大きな活動規模であった。マーカンタイル銀行は 1872 年にバタヴィアに，その翌年スラバヤに店舗（1880 年まで）を開設した。周知のごとく，1830 年にオランダによって導入された蘭領東インドの「栽培制度」が 1854 年の東インド統治法の制定によって廃止の方向で検討され，1870 年代初めには本格的な民間資本の導入とプランテーション経済を支える社会経済的条件の整備が急速に進められていった[18]。1875 年にオランダがギルダー銀貨を金貨と交換することを法的に保証する金本位制に移行したことで，1877 年に蘭領東インドにも金本位制が導入された[19]。マーカンタイル銀行は，このような蘭領ジャワに新たな商機を求めたといえる。

マーカンタイル銀行の東南アジア活動で忘れてならないのが，1879 年に開設したラングーン店の存在である。ビルマのラングーンには，チャータード銀行がすでに 1862 年に進出していた。ビルマは英領インド帝国の一部であったが，歴史的にも民族的に文化的にもインド亜大陸のどの地域とも異質であり，東南アジアという地域的範疇に包摂されるのが一般的である。後述するように，ラングーンでのマーカンタイル銀行は，おもに米貿易の輸出に伴う金融を付けて収益を得た。ビルマ米はもっぱら非食用・工業用としてヨーロッパ向けに輸出された。その世界市場の需要は絶えず増え続け，1852 年のイギリスの下ビルマ併合の後には，イギリスを含むヨーロッパ諸国へのその輸出量が急増した。マーカンタイル銀行は，このビルマ米輸出貿易の急成長に連動して，それへの金融に集中したのである。

最後に，1890 年のマーカンタイル銀行のアジア展開を地域別に見ると，南アジアが 47%，東南アジアが 33%，東アジアが 20% を占めた。同行活動の重心の一つが明らかに東アジアから東南アジアへ移っていくなかで，南アジア，特にボンベイとカルカッタでは確固たる営業基盤がつくられていたといえるであろう。

3　イースタン・バンクの帝国的役割

インド貿易の拡大

19 世紀初頭以降のインドは，グローバリゼーションの影響を直接的に経験し，世界経済を主導するイギリスの製品輸出市場として，食糧・非熟練労働力・工業原料の供給源として，そして資本の投下先として不可欠な存在になった[20]。1840 年代から 90 年代半ばまでのインド対外貿易の趨勢は，全体的に増加傾向にあり，その規模は約 8 倍に膨れ上がった。そして，それは恒常的な出超構造を維持し，その傾向は 1870 年前後から強まっていった。マーカンタイル銀行のインド活動規模が大きい要因である。

インドの対外貿易の拡大は，同時に内陸交易も発展させた。その両者の相互作用を促進したのが，大貿易都市からその内陸後背地へ放射状に伸びる運送・交通（道路，鉄道，運河等）網であった。ダルハウジー総督時代（在任 1848～56 年）以来のインフラ建設事業は，軍事的侵略・併合の強行を伴いながら，特にカルカッタとボンベイをゲートウェイに進化させた。初期の鉄道建設を行なったのは，インド政庁の元利保証制度によって手厚く優遇された鉄道会社である。その経済政策で対象とされたのが，特にランカシャー地方からの需要の大きい棉花地帯，とりわけボンベイを中心にしたインド西部地域であった[21]。同様の鉄道建設はベンガルやマドラスでも行なわれ，1880 年代までには鉄道幹線網が完成した。

インド東部では，東インド鉄道会社（East Indian Railway Company）がカルカッタを基点にして北西部地域へ路線を延ばした。パトナーやベナレスで生産されたアヘンはこの路線でカルカッタに運ばれ，中国や東南アジアへ輸出された。また，ベンガル地方やアッサム地方は降水量が多く，インド有数の米作地帯であった。インディゴはベンガル地方で栽培されてきたが，19 世紀後半になると，その産地の中心がビハール地方や北西州東部へ移った。

19 世紀後半のベンガル地方には，その主要輸出品目の一つとなったジュートの耕作地と製品工場も集中した。そして，鉄道業とジュート工業の発展は，その動力資源である石炭への需要を高めた。商業的な石炭生産は東部内陸部で 18 世紀半ばから行なわれたが，本格的な石炭産業の成長は鉄道建設と在来産業の発展によって促進された[22]。アッサム産紅茶の輸出も順調に拡大した。同地方の主要交通は汽船水運であり，カルカッタ基点の鉄道路線がアッサム・バレーの茶園地帯へ伸張するのは 1880 年代後半まで待たねばならなかった[23]。

このように，インドにおける港市指向型の鉄道・交通網は，大貿易港を有するゲートウェイを基点にして，沿岸貿易ならびに遠隔地貿易の船舶網と連動することによって，インド貿易の世界経済との接合をますます強化させた。このなかで，イースタン・バンクも商品貿易とその関連産業へ深く関わるようになったのである。

ルピー資金の調達と「インド省手形」システム

マーカンタイル銀行のインド店は，設立当初から3大管区都市すべてに配置され，アジア店全体で常に4-5割の活動規模を占めていたキー・ステーションであった。そのなかでもボンベイ店とカルカッタ店の規模が特に大きかった。ここでは，1870年代・80年代における両店の営業内容を貸借対照表等から明らかにする。

まずボンベイ店とカルカッタ店の資金調達面であるが，これに関する情報のほとんどは貸借対照表（図表5）の「負債・貸方」部から得られる。それによると，両店は，もっぱら送金者への為替手形の販売（「支払手形・手形振出」項目）と当座・定期預金の引き受けによって，ルピー資金を獲得していたのがわかる。イースタン・バンクの主要業務であった外国為替取引は豊富な資金準備を必要とし，営業現地でのその調達能力が極めて重要であった。

しかし，マーカンタイル銀行インド店の場合，当該期での手形販売と預金集金の実績は，特にボンベイ店の不振によって非常に悪い状態で，事業拡大を可能にするほどの資金を調達できていたとはとてもいえない。というのは，資金運用面（図表5の「資産・借方」部）をみると，両店のルピー資金が現地輸出業者からの為替手形の購入（「受取手形・送付手形」項目）で運用されていたのが一目瞭然だが，その購入総額は資金調達額をはるかに超えていた。この原因はインド対外貿易の恒常的な出超構造から生じており，マーカンタイル銀行，ひいてはイースタン・バンクは常時，インド現地での慢性的なルピー準備不足に対応しなければならなかった。

この問題を解くもう一つの鍵は，（図表6）で示した「他店からの借入金」である。マーカンタイル銀行では，さまざまな経済状況に対応し，本店・支店内で柔軟に資金の貸借が行われた。ボンベイ店とカルカッタ店は1880年代初頭まで，マドラス店は80年代以降，ほぼ毎年，他店から資金を借り入れていた。その出所は，ほぼロンドン本店であった（図表6の「他店への貸付」を参照）。1880年代半ばになると，ロンドン本店のアジア各店への貸付が停止したが，この要因の一つは，世界的な銀価下落への対応策として，アジア各地で運用されていたポンド資金（ロンドン本店で保有されたアジア各店のポンド預金）が回収されたためである[24]。同時期，コロンボ店が，貸付金の出所として一定の役割を演じていたのは，興味深い。

ルピー準備不足の問題を解く鍵を提供するのは，インド政庁であった。インド政庁は，18

図表 5　マーカンタイル銀行 2 店の貸借対照表と資本金配分表

		ボンベイ店						
		1870 年	1875 年	1880 年	1883 年	1885 年	1887 年	1890 年
資産・借方	ロンドン送付手形	£912,904	£602,658	£553,994	£593,180	£604,296	£296,106	£1,073,037
	手形割引	£423	£326	£397	£0	£0	£0	£7,510
	貸付	£21,351	£26,115	£62,707	£51,283	£143,083	£111,143	£174,761
	政府証券	£104,940	£44,515	£475,686	£1,267	£99,000	£1,082	£103,402
	当座貸越	£16,000	£44,149	£32,534	£58,999	£160,932	£40,666	£67,083
	土地・不動産	£30,644	£31,012	£31,012	£31,012	£31,012	£31,012	£15,000
	ブリオン	£4,708	£4,168	£17,123	£190,357	£344,529	£81,068	£395,293
	銀行預金	£169,241	£89,519	£45,057	£6,576	£183,954	£237,522	£557,140
	現金手許残高	£6,237	£7,084	£31,045	£2,504	£204,026	£12,166	£16,294
負債・貸方	ロンドン払手形振出	£503,903	£368,740	£177,603	£318,254	£363,630	£278,247	£334,452
	当座預金	£282,165	£122,823	£224,033	£126,475	£218,776	£294,383	£282,515
	定期預金	£26,627	£274,124	£297,631	£155,705	£249,133	£199,657	£122,780
	借入金	£0	£0	£0	£97,689	£0	£0	£0
	銀行券	£0	£0	£0	£0	£0	£0	£0
資本金配分		£195,000	£195,000	£195,000	£130,000	£130,000	£0	£0

		カルカッタ店						
		1870 年	1875 年	1880 年	1883 年	1885 年	1887 年	1890 年
資産・借方	ロンドン送付手形	£803,125	£807,217	£846,820	£859,474	£1,132,741	£1,158,864	£1,283,939
	手形割引	£34,343	£1,382	£50,163	£22,957	£22,421	£13,316	£5,591
	貸付	£107,702	£7,862	£93,958	£24,235	£43,987	£65,034	£75,737
	政府証券	£54,245	£72,840	£190,473	£8,465	£6,665	£555	£87,864
	当座貸越	£66,253	£30,090	£124,017	£132,652	£87,621	£82,461	£125,101
	土地・不動産	£0	£0	£0	£0	£0	£0	£0
	ブリオン	£0	£2,043	£7,995	£0	£0	£24,371	£37,405
	銀行預金	£139,860	£192,947	£193,306	£85,525	£62,921	£95,237	£49,050
	現金手許残高	£7,269	£5,588	£13,589	£62,219	£8,643	£31,745	£16,249
負債・貸方	ロンドン払手形振出	£1,138,823	£520,566	£335,928	£227,936	£434,839	£311,354	£214,404
	当座預金	£96,615	£129,249	£225,712	£173,080	£157,578	£187,403	£390,504
	定期預金	£120,397	£179,174	£152,635	£83,994	£89,064	£229,173	£161,430
	借入金	£0	£0	£0	£17,300	£0	£0	£0
	銀行券	£0	£0	£0	£0	£0	£0	£0
資本金配分		£200,000	£200,000	£200,000	£235,000	£235,000	£165,000	£165,000

注：データはすべて各年 12 月末のもの。
出典：図表 4 と同じ。

世紀末以来，インドからロンドンへの「本国費」の送金を義務づけられた。東インド会社の解散後，インド政庁の本国送金義務は，1862 年 2 月より導入された「インド省手形（Council bills）」システムによって遂行されるようになった。この手形は，インド政庁の在ロンドン資金（イングランド銀行預金）を引き当てに振り出すインド政庁宛ルピー手形であった。1876 年までには，年間総額 1,500 万ポンドがロンドンで支払われるようになった[25]。すなわち，本国政府は，ロンドンでのインド省手形の販売によって，金貨をインド政庁へ送付することなく，

図表6　マーカンタイル銀行店舗間貸借勘定

		1861年	1870年	1872年	1874年	1876年	1878年	1880年	1882年	1884年	1886年	1888年	1890年
他店への貸付	ロンドン		£645,000	£560,000	£685,000	£685,000	£718,750	£585,000	£585,000				£80,000
	ボンベイ	£40,000		£100,000	£50,000		£50,000			£90,000		£25,000	
	カルカッタ						£19,000						
	マドラス									£50,000			
	コロンボ		£50,000					£50,000	£245,000	£130,000	£85,000	£20,000	£100,000
	シンガポール								£11,250				
	香港	£225,000		£22,500									£56,250
	上海								£25,200	£16,875			
	横浜									£11,250			
	合　計	£62,500	£695,000	£682,500	£735,000	£685,000	£787,750	£635,000	£866,450	£298,125	£85,000	£45,000	£236,250

		1861年	1870年	1872年	1874年	1876年	1878年	1880年	1882年	1884年	1886年	1888年	1890年
他店からの借入	ボンベイ		£100,000		£100,000	£100,000	£100,000	£125,000	£125,000				£20,000
	カルカッタ		£150,000	£150,000	£250,000	£200,000	£200,000	£235,000	£185,000		£55,000		
	ラングーン						£19,000		£80,000				£15,000
	マドラス	£20,000	£5,000						£50,000	£30,000	£30,000	£20,000	£20,000
	コロンボ				£150,000	£150,000	£100,000	£135,000	£125,000				
	シンガポール	£42,500	£100,000	£150,000	£150,000	£110,000	£110,000	£75,000	£125,200	£211,250			
	ペナン								£11,250	£40,000		£25,000	£45,000
	バタヴィア				£50,000	£90,000	£90,000						
	香港		£60,000				£58,750	£25,000	£25,000	£11,250			£80,000
	上海		£175,000	£225,000			£75,000	£25,000	£25,000				£56,250
	横浜		£6,000	£157,500	£35,000	£35,000	£35,000	£25,000	£115,000	£5,625			
	合　計	£62,500	£695,000	£682,500	£735,000	£685,000	£787,750	£635,000	£866,450	£298,125	£85,000	£45,000	£236,250

注および出典：図表4と同じ。

「本国費」を徴収することができたのである。

このインド省手形の購入者こそ，（図表7）で示すように，ロンドン・シティの有力商会やイースタン・バンクであった。それら手形購入者は，インドからの商品輸入に対する代金支払いのための送金手段を必要としていた。すなわち，イギリスの対インド輸入貿易（逆にいえばインド輸出貿易）が拡大すればするほど，インド省手形の需要がロンドンで高まるのである。（図表7）でその購入総額が激増したのは，そのことを物語っている。このインド送金手形のなかで，カルカッタ（ベンガル政庁）宛のものへの需要が最も高かった。1862年では，イギリスの対インド貿易におけるベンガル貿易の割合がいかに大きかったかが理解できるが，1882-3年になると，ボンベイ宛手形の購入額も増加した。ボンベイ輸出貿易の急拡大を示唆している。

「インド省手形」システムの全体像は，（図表8）で示すとおりである。ロンドンで購入されたその送金為替手形は，たとえばオリエンタル銀行のロンドン店からボンベイ店に送付され，さらにボンベイ政庁へ持ち込まれ，ルピーと交換された。こうしたインド省手形の一連の取引が，オリエンタル銀行ボンベイ店をして，輸出貿易の金融取引に運用される多額のルピー準備の追加的供給を可能にさせたのである。イースタン・バンクのインド各店は，インド政庁の本国費の送金業務という「帝国のビジネス」に深く関わりながら，機動性に富んだルピーを追加

図表７ 「インド省手形」の購入者とその実績

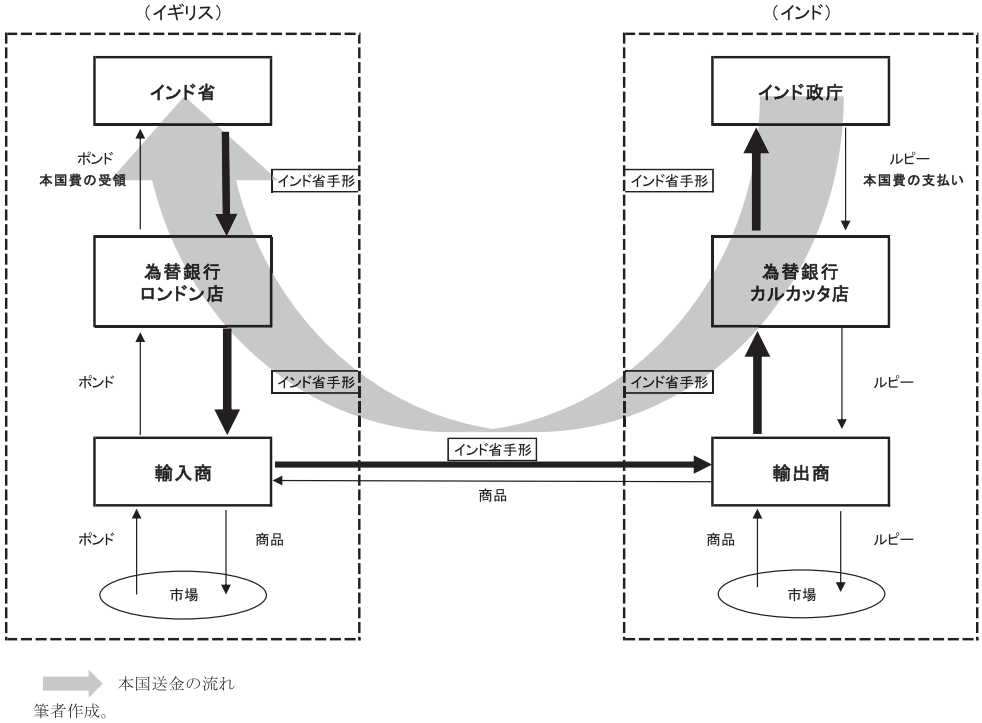
	カルカッタ宛		ボンベイ宛		マドラス宛	
1862年4月	オリエンタル銀行	Rs 1,463,000	インド・ウェスタン・セントラル銀行	Rs 236,000	W・W・ウェイト	Rs 20,000
	アグラ銀行	Rs 463,000	フィンレイ・キャンベル商会	Rs 236,000		
	N・M・ロスチャイルド商会	Rs 463,000	スティアー・カートン・ローフォート	Rs 236,000		
	マーカンタイル銀行	Rs 185,000	オリエンタル銀行	Rs 236,000		
	チャルマー・ガスリック商会	Rs 93,000	I・W・カーター・サンズ商会	Rs 30,000		
	W・I・H・トムソン商会	Rs 93,000	チャルマー・ガスリック商会	Rs 26,000		
	フォーブス・フォーブス商会	Rs 85,000				
	グリンドレイ商会	Rs 47,000				
	インド・ウェスタン・セントラル銀行	Rs 47,000				
	ウィリアム・ヘンダーソン商会	Rs 23,000				
	ピーター・ランヘン	Rs 9,000				
	マセソン商会	Rs 9,000				
		Rs 2,980,000		Rs 1,000,000		Rs 20,000

	カルカッタ宛		ボンベイ宛		マドラス宛	
1882年12月27日～1883年1月6日	マーカンタイル銀行	Rs 3,500,000	香港上海銀行	Rs 4,050,000	オリエンタル銀行	Rs 850,000
	インド・ナショナル銀行	Rs 3,200,000	チャータード銀行	Rs 3,000,000	マーカンタイル銀行	Rs 600,000
	パリ割引銀行	Rs 2,600,000	パリ割引銀行	Rs 2,000,000	インド・ナショナル銀行	Rs 200,000
	オリエンタル銀行	Rs 2,500,000	マーカンタイル銀行	Rs 1,800,000	アーバスノット・レイサム商会	Rs 10,000
	香港上海銀行	Rs 2,450,000	アグラ銀行	Rs 1,100,000		
	チャータード銀行	Rs 1,500,000	ボルカート商会	Rs 800,000		
	サミュエル・モンターギュ商会	Rs 500,000	サスーン商会	Rs 50,000		
	アグラ銀行	Rs 350,000				
	パンドルフ商会	Rs 300,000				
	ギランダー・アーバスノット商会	Rs 300,000				
	バルフォード商会	Rs 150,000				
	サスーン商会	Rs 50,000				
		Rs 17,400,000		Rs 12,800,000		Rs 1,660,000

注：1882 年 12 月末～1883 年 1 月初旬の購入総額には，電信為替（Telegraphic Transfer）を一部含んでいる。
出典：Bills on India, 2nd April 1862, no. 398, L/F/2/258 ; Council Bills, 14th–22nd December 1882, nos. 3895, 3973, 3987, L/F/2/634 ; Council Bills, 27th–29th December 1882, nos. 4016, 4019, 4020, 4024, 4047–50, 4054, 4061, 4067–68, 4071, L/F/2/635 ; Council Bills, 2nd–7th January 1883, nos. 9, 11, 27, 29, 41, 45, 49, 61–2, 70–3, 78, 86, 88, 111, 115, L/F/6/1, all in Oriental and India Office Collections, British Library.

的に調達し，インドの対外貿易の拡大にも金融的に大きく貢献するという関所ビジネスの要であったといえる。この点は，イースタン・バンク問題の一つとして，決して看過してはいけないであろう。

資金運用面（「資産・借方」部）では，両店での「政府証券」や，ボンベイ店での「土地・不動産」と「ブリオン」の保有・購入も目立つが，ここで注目したいのは貸出業務（「手形割引，「貸付」，「当座貸越」）のほうである。「手形割引」の割合は相対的に小さく，そのほとんどがカルカッタ店の実績であった。ボンベイ店での「貸付」業務が，1866 年恐慌の影響で大幅に縮小した結果，70 年代前半の「貸付」業務全体の停滞につながった。70 年代後半の若干の回復はカルカッタ店での「貸付」額の増大であった。チャータード銀行のカルカッタ店では，1878



筆者作成。

図表 8 「インド省手形」システムの概念図

年より茶園への融資が開始され，産業金融に深く関与するようになったといわれているが[26]，マーカンタイル銀行の場合でも同じ傾向が十分に考えられる。1880 年代，その後半以降，再び「貸付」実績が回復して一定の大きさの割合を継続的に占めるようになった。その理由はボンベイ店での貸付業務の急拡大であった。このような特徴は，マーカンタイル銀行がインド内部の商品流通や生産過程との結びつきをそれまで以上に強め，そのビジネス内容を多様化させていたことを意味する。

4　マーカンタイル銀行の南アジア展開

ボンベイ店

マーカンタイル銀行のボンベイ店は，アメリカや他のアジア諸国へのさまざまな商品の輸送に金融サーヴィスを提供した。イギリス植民地都市のボンベイは，1847・48 年商業危機後，カルカッタほどの悪影響を受けずに商業的繁栄を経験し，インド経済開発の中心となった[27]。それを象徴するように 1853 年 11 月に設立されたのが，マーカンタイル銀行であった。そして，1860 年代前半の棉花ブーム[28]以来，インド西部産原棉の輸出金融が同行ボンベイ店の中軸的

業務となったのである。

マーカンタイル銀行ボンベイ店は，エワート・レイサム商会（Ewart Latham & Co.），G・モティー商会（G. Motee & Co.），ヴォルカート・ブラザーズ（Volkart Brothers），ウォレス商会（Wallace & Co.），ヌープ商会（Knoop & Co.），キリック商会（Killick & Co.），そしてインド西部の原棉貿易で支配的であったラリー・ブラザーズ（Ralli Brothers）やギャダム商会（Gaddum & Co.）のような多くの有力商会を常連の顧客にもった[29]。これらのヨーロッパ系有力商会は，銀行からの金融サーヴィスを得ることで原棉輸出へのさらなる統制力を強化した。

ボンベイ店の大口顧客には，大インド半島鉄道会社（Great Indian Peninsula Railway Company）が含まれていた。1849 年に設立されたこの鉄道会社は，ボンベイを起点にして後背地へ向けて路線を伸ばし，1870 年までにはジュバルポールでカルカッタからの東インド鉄道と接合した。ボンベイのイギリス系商会はこの鉄道網の確立に合わせて奥地での原棉の直買いを開始し，その栽培地に近い場所まで綿操・俵装機械を搬入して工場を建設し，内陸市場においても存在感を高めるようになったのである[30]。

他方において，1850 年代後半から，パールシーやヒンドゥー・バニアのような在地豪商たちによって，紡織工場が主として内需向けの太番手紡績糸を生産するために設立された。1877・78 年不況とその結果としての内需萎縮によって，インド綿糸は中国粗糸市場へ本格的に輸出され始めた。そして，インド系商会のみならずヨーロッパ系商会もまた，多くの綿工場をボンベイ，アフマダーバード，スーラト等に設立した[31]。マーカンタイル銀行ボンベイ店は，1880 年代においてダルムジー紡織会社（Dhurrumsey Spinning & Weaving Company, Limited）やクライズデール染色・織物会社（Clydesdale Dying & Manufacturing Company, Limited）へ多額の貸出を行なった[32]。

ボンベイ店は紅海エリア向けの貿易金融も引き受けていた。その中心であったアデンは，インド政庁によって 1850 年に自由港と定められ，紅海エリアの陸上・海上交易の一大センターとして，とりわけコーヒー貿易の中継港として発展した[33]。1860 年代前半には，紅海周辺で生産されたコーヒーがアデンに集められ，その一部がザンジバルを経由してマルセイユへ輸出されるようになった。そして，1869 年のスエズ運河の開通と 1870 年のヨーロッパ－アデン間海底電信ケーブルの開設は，アデンのコーヒー貿易をさらに刺激した。コーヒー豆は 1870 年代にはエチオピアやイエメンからもアデンに運ばれ，再輸出された。英領アデンは，以前はジェッダ（ジッダ），カイロ，アレキサンドリアを経由してヨーロッパに運ばれていたコーヒー貿易の大きな流れを支配するようになった[34]。

スエズ運河の開通はロンドン－ボンベイ間の海上輸送距離を約 11,000 マイルから約 6,300 マイルに短縮し，大型汽船による遠隔地貿易をさらに発展させた。この汽船時代の到来によって，その動力源である石炭は，スエズ－ボンベイ間のほぼ中間地点であるアデンに貯蔵された。ア

デンでの石炭取引が増大した結果，マーカンタイル銀行ボンベイ店は，アデンに拠点をもつルーク・トーマス商会（Luke Thomas & Co.），ヴィエンフェルド商会（Bienefeld & Co.），アデン石炭会社（Aden Coal Company）の貿易に金融を付けるようになった[35]。オーストリア系のヴィエンフェルド商会は，アデンの大手コーヒー貿易会社の一つであった。

ボンベイ店は中国向けの輸出貿易（アヘン・綿糸・織物）に深く関与し，デヴィット・サスーン商会（David Sassoon & Co.）も顧客にしていた[36]。デヴィッドは1830年代半ばにおいてバグダッドからボンベイへ移住し，徐々に中国向けの原綿やアヘンの輸出業を営み始めた。ロンドンに本社を置くＰ＆Ｏ汽船会社が，1845年にはインドと中国へ契約航路を拡大することに成功し，中国産の茶とインド産のアヘンなどの商品輸送，さらに政府・陸軍関係者の輸送で発展していた。デヴィットの子息たちは中国に渡り，航路を拡張させるＰ＆Ｏの輸送サーヴィスを利用したインド綿製品やアヘンの輸入貿易業を手がけた。彼らは一族の経営するインド商会と連携して，ボンベイやカルカッタでのアヘン価格を操作できるほどの存在となった。サスーンは，ジャムセトジー・ジェイジェイボウイ ―― ジャーディン・スキナー商会 ―― ジャーディン・マセソン商会というアヘン・シンジケートの強力な競争相手となった[37]。ボンベイ店は，サスーン商会との関係を通して，アジア間貿易の一局面に関与していたのである。

非常に興味深い銀行資料として，香港上海銀行ボンベイ店の当座預金口座顧客リスト（1875年1月20日付）が存在する[38]。それが（図表9）である。それによれば，164の個人事業主や企業によって当座預金口座が開設され，総額約180万ルピーが預金されていた。その口座保有主には，フォーブス商会，ギャダム商会，ヴォルカート・ブラザーズ，ニコル商会（W. Nicol & Co.），リッチー・スチュワート商会（Richie, Stewart & Co.）など，ヨーロッパ系有力貿易商会の名前が列挙する。

貿易商のみならず，アルバート・ミル会社（Albert Mill Co.：払込資本金68万ルピー），ナショナル紡織会社（National Spinning & Weaving Co.：払込資本金50万ルピー），コラバ紡織会社（Colaba Spinning & Weaving Co.：払込資本金150万ルピー），ヒンドスタン紡織会社（Hindostan Spinning & Weaving Co.：払込資本金100万ルピー）のような大綿業会社[39]も香港上海銀行に預金口座を持ち，中国との手形決済や貸越（自動借り入れ）を行なっていた。

しかし，当座預金口座リストで最も目立つ存在は，デヴィット・サスーン商会，E・D・サスーン商会，ヒンドゥー・バニア棉花商の Thackersey Mooljee，ジャイナ系アヘン豪商の Currumchund Prechund をはじめとする多くの非ヨーロッパ人顧客である。彼らはほぼ例外なくボンベイを代表する豪商であったが，そのなかでも Pestonjee Dadabhoy のようなパールシーが圧倒的な割合を占めていた。マーカンタイル銀行ボンベイ店も，B. & A. Hormarjee, Dadabboy Hosungjee & Co., Nanabhoy B. Jugubhoy & Co., Dwarkadass Jeedandass といったパールシー商人と日常的に取引していた[40]。

図表9　香港上海銀行ボンベイ店の当座預金口座顧客（1875年1月20日付）

ヨーロッパ系		非ヨーロッパ系					
Babot, George J.	Mcdonald C. & Co.	Ardaseer Pestonjee Setna	Dadabhoy Jamasjee	Goculbhoy Moolchund	Luckmichund Lowechund	Nuginbhoy Roopchund	Sewlall Moteelall
Bombay Diocesan Board of Education	McCombie, Alexader	Ardeshir Mahrhan Eranee	Dulputram Goculdass	Govindjee Doongersey & Co.	Lowjeebhoy Rustomjee Setna	Nursey Kessowjee & Co.	Sawaram Khoosalchund
Beck, F. H. Lietenant	Mody R.	Ardaseer Byramjee Liboovala	Dadabhoy Hosungjee	Gooljee, Boetram	Luckmidass Maneckjee	Pestonjee Dadabhoy	Tapidass Vurjdass
Barlow, Captain A. E.	Moir George W.	Ameeroodeen Abdool Lutiff	Dhunjeebhoy Nowrojee	Gopajee Canjee	Lallchund dewchund	Pestonnjee Darashaw Setna	Tezpall Gopejee
Bombay Saw Mills Co.	Nicol W. & Co.	Albert Mills Bomany, Limited	Dhurumsey Poonjabhoy	Heerjeebhoy Hormusjee Setna	Muncherjee R. Dossabhoy & Co.	Pestonjee Muncherjee Wadis & Co.	Thackersey Mooljee
Bombay Hemp & Jute Co.	National Spinning & Weaving Co.	Abaydeen Budroodeen & Co.	Dinshaw Bhikhajee Khan & Co.	Hurnarayen Maneckram	Mahoed Ally-bin, Hajee Mabh. Banker Babaney	Pherozeshah M. Mehta	Tribhovundass Veerjee
Commercial Bank Corporation	Noble, G. E.	Allarukhiabhoy Sewjee	Dossabhoy Hormusjee Cama & Co.	Hajee Esmail Jaitha's Son	Muncherjee D. Nowsariwalla	Purshotum Oomersey	Veerchund Kurrumchund
Carwar Company, Limited	Pinto, J. C.	A. H. Chinoy	Dorabjee Bazonjee & Co.	Hindstan Spinning & Weaving Mills Co., Limited	Merwanjee Jeejeebhoy's Son	Pallonjee Bomanjee	
Clason & Co., H.	Port Canning & Land Improvement Co.	Ardaseer M. Katia	Dinshaw dadabhoy Ghandy & Co.	Hajee Esack Soab & Son	Muncherjee Pestomjee Setna	Premjee Parpis	
Cope, Stanley	Parker, F. D. Treasuerer, Sailers' Home	Ardaseer Merwanjee	Dewjee bhoy Goolamhoosein & Co.	Harvalabhdass Bal Govindass	Mussockan Camdass	Pokerwall Groorand	
Colaba Spinning & Weaving Co.	Raphael & Co.	Ardaseer B. Topulia	Deepchund Rowchund	Hajee Esmail Hajee Hubib	Maneckjee Petit's Spinning & Weaving Mills & Co.	Rustomjee Framjee Setna	
DeSouza, S. J. Raphael Co.	Past due Bill a/c	BurJorjee Muncherjee Oonwala	Dhunjeebhoy Pestonjee	Jehangeer Hormusjee	Muncherjee Rustomjee Setna	Rehmoobhoy Hubibbhoy	
Edrahim Noordeen & Co.	Ritchie, Stewart & Co.	Bhicoo Sazba & Co.	Dadabhoy Dinshaw Ghandy	Jairam Narronjee	Munsookbhoy Bhugoobhoy	Rustomjee Dhunjeeshaw & Co.	
Elias, George	Scott, Stanley, Col.	Bomanjee N. Vakeel	Damodurdass Tapidass	Jamsedjee Nusserwanjee Mehta	Muccoonjee Samjee	Remtoola Cadurbhoy	
Forbes & Co.	Siegfried, Jules, & Co.	Cassumbhoy Dhurrumsey	Dayal Rultousey	Jallbhoy Dorabjee	Munjee Currimbhoy	Rustomjee D. C. Setna	
Gaddum & Co.	Sedgwick F. W.	Currimbhoy Ebrahim	Eduljee Ruttonjee	Jehangeer Gustadjee	Munguldass Nathoobhoy	Ruttonsey Khimjee	
Gregor, J. M. No. 1 a/c	Simpson J. Bell	Cumroodeen Tyabjee	Eduljee Rutomjee Juveria	Jairazbhoy Peerbhoy	Morarjee Goculdass	Rustomjee Dhunjeeshaw	
Gregor, J. M. No. 2 a/c	Town Hall Organ Fund	Cursetjee Cowasjee Dulal	Ebrahim Noordeen	Javerchund Jootha	Morarjee Goculdass Spinning & Weaving Co.	Sassoon, D. & Co.	
Ghella V. K. & Co.	Telegram Account	Cowasjee Hormusjee Chinoy	Eduljee Manockjee Setna	Jumnadass Ramjee	Muusooglall Meggoulall	Sassoon, E. D.	
Hector, G. N.	Tapidass Vurjedass & Co.	Currumchund Premehund	Framjee Burorjee Captain	Jehanjee F. Molla Feroz	Nowrojee Maneckjee Contractor	Shariff Salemahammad & Co.	
Khalam Makenjee Spinning & Weaving Co.	Tharia Topun	Cumulsey Premjee	Framjee Hormusjee Setna	Khimjee Oodhowjee & Co.	Narielwala, S. S.	Sassoon Spinning & Weaving Co.	
Lockhart, George & Co.	Volkart Brothers	Cassuwally Auverally	Godraz Mehrban Eranee	Khimjee Oodhowjee	Nusserwanjee Bomanjee Mody & Co.	Sassoon Spinning & Weaving Co. No. 2 a/c	
Leone Jahier & Co.		Dossabhoy Rustomjee Moteewala	Govind Balcrustna	Khoosal Lukhimchund	Nowrojee Hormusjee Patch	Sockeer Kessrinath	

出典：Bombay Agency, Current Account Balances, 20th January 1875, K/8/2, no. 26, McLean Additional Papers, Hong Kong & Shanghai Banking Corporation History, HSBC Group Archives.

イースタン・バンクのアジア各店は数名のイギリス人銀行員によって運営されたが，実際の日常業務の遂行には現地社会に密着する現地スタッフを必要した。実際，英領インド，セイロン，海峡植民地，バタヴィアの各銀行支店では，ヨーロッパ人顧客は銀行支配人と直接的に取引する一方で，現金と現地人顧客の管理は主任シュロフによって行なわれていたようである[41]。主任シュロフとその部下たちは銀行と現地実業家との重要な仲介者で，その業務は多くの点で中国の買弁のそれに類似した。彼らは，一部は自己資金，またはフンディー手形の割引で調達したルピー資金で貸出業務を行なった[42]。より多くの非ヨーロッパ系顧客の獲得は，シュロフの手腕にかかっていたといえよう。

1870 年代のマーカンタイル銀行ボンベイ店のスタッフのなかで最も特異な人物が，主任シュロフに就いていたペストンジー・カカというパールシーであった[43]。ペストンジーの父親アルデシャール・カカはマーカンタイル銀行のシュロフ長として，その設立時に就任した。その時にシュロフ補佐員に就いたペストンジーが父親のポストを引継ぎ，1888 年に亡くなるまでその職を全うした。彼の後継者は子息のリムジー・カカとなり，彼は 1906 年まで続けた。このように，銀行の主任シュロフという立場は土着実業界の富裕商家によって継承されていった[44]。

カルカッタ店

マーカンタイル銀行は 1854 年にカルカッタ店を開設し，ベンガル地方で着実に営業規模を拡大させていった。ベンガルからの主要輸出商品といえば，インディゴ，アヘン，原棉，生糸，絹織物等であった。しかし，1860 年代以降，インディゴの相対的減少とともに，新たな対外輸出商品が登場した。カルカッタ店は，それに対応するように，米（Blackwood, Blackwood & Co.），コーヒー・茶・生姜・キナ皮（Hindley & Co.），小麦・ジュート（G. W. Lees & Co.），皮革（H. & M. Rantenbur）を取り扱う輸出貿易の金融を行なって，大きな利益を得ていた[45]。同店は，仏領レユニオンへの米やオーストラリア植民地へのジュート袋・茶の輸出貿易にも金融を付けていた[46]。

カルカッタ店の極めて重要な特徴は，茶，コーヒー，インディゴのプランテーションのような産業金融へ深く関与していた点であった[47]。さまざまな大規模農園の維持費は，ダンカン商会（Duncan Bros. & Co.），オクタヴィアス・スティール商会（Octavius, Steel & Co.），南シレット茶会社（South Sylhet Tea Company），エンドグラム茶会社（Endogram Tea Company Limited），ラングラ茶園（Lungla Tea Estate），エラ茶園会社（Elah Estate Tea Co.）を通して前貸しされた[48]。マーカンタイル銀行は，ロンドンや他のイギリス商会の保証のもとで，土地，約束手形，その他資産を担保に対する貸出業務を行なった。1860 年代以来，北部ベンガルのダージリン丘陵地帯やドアーズ地域での茶栽培のエステートが拡大し，80 年代になると，アッサム地方における茶園，製茶量が急速に増加した[49]。

茶産業への金融と同時に，ヴィクトリア・ジュート会社（Victoria Jute Company）のようなジュート工場も，カルカッタ店の大口顧客であった[50]。ジュートはベンガル農業・工業分野における主力商品であり，カルカッタ経営代理商会の製造業部門の中心となっていた。世界貿易が拡大すればするほど，農業生産物を輸送するための丈夫なジュート袋への需要が高まり，それが大量にヨーロッパ諸国，南北アメリカ，オーストラリア植民地，そしてアジア各地へ輸出されたのである[51]。

東部インドでは，1880 年代半ばには整備された主要幹線鉄道は農業地帯を市場町に連結し，最終的にカルカッタで海運ルートにつないでいた。マーカンタイル銀行ロンドン本店は，インド鉄道会社との取引関係をもち，定期的に信用状の発行を承認していた。その一例がベンガル・北西鉄道会社（Bengal and North Western Railway Company）であった[52]。1882 年に創業したこの鉄道会社は，アヘン生産地のパトナーとより内陸のバーライチとを結ぶ路線をガガラ河に沿って建設し始め，1884 年に開通させた。

マーカンタイル銀行カルカッタ店は海運会社とも関係をもち，ブリティッシュ・インディア・ジェネラル汽船会社（British Indian General Steam Navigation Company）とイラワジ・フローティラ会社（Irrawaddy Flotilla Company）へ融資をしていた[53]。カルカッタ店はビルマの植民地開発を直接関与する企業との関係も親密であり，鉄道の枕木に使われたチーク材をインドへ輸送するアラカン会社（Arracan & Co.）や精米工場を経営するダンカン商会（R. S. Duncan & Co.）への前貸しを日常的に行なっていたのである[54]。

ラングーン店

イギリスはビルマにも侵攻し，その領土全域を 1880 年代半ばまでに英領インドの一部にした。マーカンタイル銀行がラングーン店を設けたのは，1879 年のことであった。とりわけビルマ米に対するヨーロッパ市場での需要の増大は，下ビルマでの農地開墾とそのための上ビルマやインドからの労働者の流入を急速に促し，輸送技術と交通インフラの向上，さらには精米技術の近代化によって，その輸出貿易を成長させた。

英領ビルマには，対外貿易港としてラングーン，バセイン，アキャブ，モールメインが存在した。1826 年にアラカン地方がイギリスの支配下に置かれ，アキャブが米の輸出地として栄えたが，1860 年代にラングーンからの輸出量が増大し，70 年代には他港を完全に圧倒していった[55]。世界市場へのビルマ米の輸出量はタイ米やベトナム米よりも大きく，ビルマは東南アジア最大の米輸出地域としてその地位を築いたのである[56]。

マーカンタイル銀行ラングーン店は，米収穫の繁忙期にはカルカッタ店から現金を必要な分だけ特別に借り入れて，ビルマ米の輸出金融や精米業者への貸付を行ない，その輸出貿易の促進に貢献していた[57]。米貿易で興味深い動きは，ビルマ米の多くがヨーロッパやインドのみな

らず海峡植民地にも輸出された点で，1880 年代では南アジア方面よりも東南アジア方面への輸送量のほうが多かった[58]。この米貿易はラングーン店－シンガポール店間の為替取引に反映されており[59]，同行が東南アジア域内貿易に関与した一つの事例であろう。

ラングーン店の顧客には，スティール・ブラザーズ（Steel Brothers），W・S・スティール商会（W.S. Steel & Co.），バロック・ブラザーズ（Bullock Brothers），モール・ブラザーズ（Mohr Brithers）というビルマ米産業を先導するヨーロッパ系商会が含まれた[60]。マーカンタイル銀行は，ラングーンのみならず，アキャブ，バセイン，モールメインにも輸出用白米を製造する工場を所有したこれらの商会に対して，在庫の商品あるいは不動産証券を担保にした貸付，あるいは輸出金融を行なっていたのである。

マーカンタイル銀行取締役会は，ロンドンのワラス・ブラザーズ（Wallace Brothers）の勘定によるラングーンのアラカン会社への多額の支払いの信用をくりかえし認可していた[61]。これは，おもに米とチーク材の輸出貿易への与信業務であった。米と同様に，ビルマの主要輸出品であったチーク材はヨーロッパ諸国に輸出されたが，その全輸出の 6～7 割はインドに向けられた[62]。前述したように，英領インド各地では鉄道建設が急速に進められ，その線路の土台となる枕木にチーク材が使用されていた。企業の多くは天然資源の採掘業にも投資しており，それと表裏一体となって森林開発のためのチーク伐採業に従事した。1880 年代になると，ブリティッシュ・インディア汽船会社（British India Steam Navigation Company：）やアジアティック汽船会社（Asiatic Steam Navigation Company：1878 年創業）がベンガル湾汽船サーヴィスをめぐって激しい競争を展開し，チーク材その他の商品の大量かつ迅速な輸送を可能にする船舶が安価に利用できるようになった。

シティのマーチャントバンカーであるワラス・ブラザーズは，アラカン会社のほかに，ボンベイ・ビルマ貿易会社（Bombay Burma Trading Corporation）やワラス商会（Wallace & Co.）を通じて，インドやビルマへ投資していた。これらの経営代理商会は，ビルマにおいて精米産業を含む多角的な事業を展開したが，特にボンベイ・ビルマ貿易会社は 1863 年の創業と同時に，ビルマ国王から上ビルマでのチーク伐採権を取得し，その輸出業に従事していた[63]。このワラス・ブラザーズやビルマのルビー採掘利権に絡んだロスチャイルド商会のように，シティのジェントルマン資本家たちの商業的野心がビルマへ向かい，1885 年のイギリスのビルマ征服を先導したといわれている[64]。

マーカンタイル銀行のラングーン業務で注目すべきもう一つの特徴は，チェッティヤールとの信用取引であった。同銀行ラングーン店は，シンガポール店やペナン店と同じように，現地商人によって使用されたバザール手形を割引する形でチェッティヤールたちへの貸付業務を行ない，高い利子収入を得ていたのである[65]。マーカンタイル銀行のチェッティヤールたちへの貸付業務は，さらにコロンボ店でも行なわれていた[66]。

ビルマでは，チェッティヤールたちは，1880 年代のコメ輸出経済の急展開とともに，ラングーンやモールメインを拠点にした支店網を下ビルマ内部の農村地帯へ拡大させ，おもに米農民に対する農業貸付で大きな役割を果たすようになった[67]。その場合，債権者の彼らが債務者の農民から担保として受け取ったのが，商品価値の高い開墾した土地であった。チェッティヤールは，農民が土地の開墾や米の生産，さらには生活費等に必要とする以上の資金を，担保価値の許す最大限度まで，ある意味，攻撃的に貸し付けた。多少の資金的余裕を得た農民たちは，外国商品やアヘンへの消費を強めながら，チェッティヤールへの金融的依存度を高めていった。しかし，農民が不測の事態で借金の返済不能に陥ると，その土地は抵当流れとなってチェッティヤールの手に落ち，即座に売却されたのである[68]。チェッティヤールたちは，米農民のほかにも，籾米ブローカー，米商人，大地主，そしてビルマ人高利貸にさえ，一定程度の貸付を行なった[69]。こうしたチェッティヤールの金融活動は，南インドの「総元締め」から託された一定の運転資金を基盤にして，さらにマーカンタイル銀行やチャータード銀行から融通によっても補われ，ビルマで展開していたのである。

ペナン店

マーカンタイル銀行は，イースタン・バンクでは最初にペナンへ進出した。1786 年にケダ王国から東インド会社へ譲渡されたペナン島は，近接するマレー半島のウェズリー州を含めて，急速に植民地化されていった。ペナンの海上貿易は海峡物産の収集・再輸出センターとして順調に繁栄し，シンガポールやスマトラ島沿岸と同時に，ベンガル湾沿岸一帯とも親密な貿易関係をもった[70]。

19 世紀後半になり，ペナンのインドや中国とのアジア間貿易は，船舶航路のシンガポールへの集中によって下火になったとはいえ，一貫して続いていた。ペナンはマレー半島西海岸とスマトラ島東海岸を取り囲むような局地経済圏を形成し，そこで生産されるコショウ，ビンロウジ，籐，タバコ，その他商品の重要な集散センターであり続けた。そして，その見返りとしてインドのアヘンや綿製品，ヨーロッパ商品や他のアジア商品がスマトラ島各地へ再輸出されていた。さらに，シャム，ペグー，ラングーン，ジャンク・セイロン（プーケット）から米，ツバメの巣，スズがペナンへ運ばれた。そしてその見返りとして，さまざまな織物，アヘン，中国製品がペナンからそれらの地域に分配されたのである。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてスズ産業やゴム農園が発達し，すぐにマラヤ植民地経済の主軸となった。ペナンはおもにマレー半島西海岸，とりわけペラで生産されたスズの集積地と輸出港としてますます発展した[71]。これらすべての経済活動の繁栄が，ペナンでの銀行サーヴィスの必要性を高めていったといえる。

マーカンタイル銀行ペナン店は，インド宛手形の振り出し（販売）をかなりの規模で行なっていたが，その一部はアヘン輸入の金融に関わるものであった。アヘン貿易の拡大によって増

大するこの為替取引は現地通貨（ドル）の獲得を可能にし，他の為替手形の購入や手形割引・貸付業務で運用することができたのである。事実，支店報告書（1882年）には，インド宛手形の振り出しと同時に，スズとコショウの輸出に対する香港宛手形が購入されたこと，さらに支店資金の多くがおもにチェッティヤールやアヘン業者に対する手形割引に運用されたことが記されている[72]。シンガポールと同様に，ペナンの華商がアヘン購入の際に振り出した約束手形を保証して高利子を付けて割り引いたのが，チェッティヤールであった。そして，チェッティヤールがその手形の再割引を依頼した先が，マーカンタイル銀行のペナン店なのであった。逆にいえば，この手形取引の流れは，マーカンタイル銀行からチェッティヤールへの貸出，そしてチェッティヤールから華人商人への再貸出を意味し，同行のペナン一帯の内国流通過程への強い金融的関与に他ならないのである。こうした現地手形の割引業務は，少なくともチャータード銀行ペナン店でも行なわれていた[73]。手形割引のみならず，特にアヘン販売所や賭博場を経営する徴税請負華人たちへの資金貸出も，積極的に行なわれていた[74]。

しかし，こうしたチェッティヤールや華人たちは，単にイースタン・バンクの仲介業を演じていたわけではなく，ペナン貿易の繁栄に敏感に反応し，金貸業，地域貿易業，沿岸船舶業，商業的農業等のさまざまな事業を展開した企業資本家であった。事実，ペナンのアヘン華商たちは，さらなる利権を求めてシンガポールへ進出し，マーカンタイル銀行シンガポール店で定期預金口座を開設するほど活発であった[75]。さらに彼らは，シンガポール華人と同様に，マレー半島におけるスズ鉱の開発を推進した。アヘンと同様に，スズも華人社会の指導者たちに莫大な富と権力をもたらしていた。スズ利権を牛耳る華人資本家たちの力が，上記の徴税請負施設と一体となって，ペナン島内，そしてそこから後背地（マラヤ，シャム南部，スマトラ島）の奥深くまで拡がった商品・信用連鎖の統制・支配で大いに発揮された[76]。そのような有力華人の社会的・経済的影響力が確実な担保となって，マーカンタイル銀行ペナン店は華人系商会への資金貸出を行なうことができたのである[77]。これは，イースタン・バンクとチェッティヤールとの関係にも当てはまることであろう。

5　お　わ　り　に

19世紀後半の南アジアとその周辺地域は，イギリス帝国主義の強い支配・影響下に置かれながら，世界経済体系に包摂されていった。その各地の輸出貿易の成長は，輸送交通網の確立と連動してイースタン・バンクの「関所」ビジネスを刺激し，そしてその外国為替サーヴィスの提供によって，ますます促進された。イースタン・バンクは，「富の流出」の手先として理解する[78]だけではなく，アジア貿易の成長と相互に連動し合うグローバル資本の代表として捉えることができる。

本稿で取り上げたマーカンタイル銀行は，ボンベイとカルカッタに中核的な「関所」を配置しながら，アジア事業の展開を活発化させ，他の英系銀行との激しいビジネス競争を展開した。その「関所」ビジネスには，現地のニーズに対応した預金，銀行券の発行，公債引受，手形割引，貸付など各種業務があったが，最大の収入源はインド対外貿易に従事するヨーロッパ系商会との外国為替取引であった。

銀行機関としての重要な役割は，現地通貨での運転資金の十分な準備と機動性によって果たされる。しかし，インド貿易の恒常的な出超構造は，その貿易規模の巨大さゆえに，イースタン・バンクのインド各店にとってはルピー貨の深刻な準備不足を意味し，その補てん作業を常に強制する特徴を有していた。それを多少とも解決する手段の一つが，英印関係を決定づける「インド省手形」システムによって提供された。政府が主導するこの「帝国のビジネス」は，インドからの本国費の調達を可能にすると同時に，英印間貿易決済とインドへのルピー貨の追加的供給という金融的機能も持ち合わせていた。こうして調達された銀行の営業資金は，為替業務のみならず，1870 年代以降，ボンベイとカルカッタで増大した貸出業務，より具体的には，生産工場の設備投資，あるいはプランテーション経営や鉄道建設への融資にも運用されていたのである。

マーカンタイル銀行は，単にヨーロッパ系商社だけを相手して関所ビジネスを展開していたわけではなく，パールシー商人，ユダヤ商人，チェッティヤール，華商らとも密接な取引関係を築くことによって，地域内部の生産・流通過程に少なからず関与するようになった。彼らアジア系商人たちこそ，まさにアジア間貿易の主役であった。マーカンタイル銀行のボンベイ店・ラングーン店・ペナン店のみならず，香港上海銀行のボンベイ店でもアジア系商人たちとの取引が日常的に行なわれ，銀行の営業拡大と収益に結びつけていたのである。

イースタン・バンクから融資を受けたチェッティヤールたちは，海峡植民地，マレー半島，ビルマ，セイロンにおいて，農民，プランター，アヘン業者，鉱山主への貸付に積極的に応じ，植民地主義開発での重要な役割を演じた。マーカンタイル銀行ペナン店は多くの華商も顧客とし，彼らと協働しながら業務拡充を実現し，マレー半島における第一次産品輸出経済の形成と発展に深く関わっていったといえる。そして，銀行各支店が雇用していた数名の非ヨーロッパ人スタッフの存在も，イギリス銀行資本のアジア地域経済への関わり方を考えるうえで注目に値すべき特徴なのである。

チェッティヤールや有力華商の主要拠点は，外国貿易金融を専門とするイースタン・バンクの立地場所でもあり，各ネットワークを集散・接続・変換させるゲートウェイであった。イースタン・バンクは，そこでヨーロッパ商人やアジア商人と友好的な関係を維持しながら，入手可能な収益の独占を画策する「関所資本主義」を展開した。しかし，その関所づくりは，アジア系有力商人・金融業者たちの一部も同じである。たとえば，華人信用関係による商品現物の

交換とその帳簿振替決済は，一見すると原始的な商業形態のようではあるが，イースタン・バンクと接続することによって，反ー市場原理に基づいた「関所資本主義」として再編されたと考えられる。これが「ヨーロッパとアジア」との出会いと融合の一つの帰結であり，そうした「場」には植民地国家も張り付き，帝国支配体制の成立・維持・運営に必要な税収の独占を模索したのである。

先述したレイのアジア三層経済構造は，19 世紀以降に新たに形成された「バザール経済」をその中層に設定することで，「西洋の衝撃」に対するアジア人商人たちの能動的な姿を描き出した点で注目に値する。しかし，上記で示唆したように，その最上層にある「資本主義」世界は，欧米系有力商会・銀行だけで占められたわけではなく，その「一部」とアジア系有力商人の「一部」によって構成されていたように思われる。両者は反ー市場原理（独占）で行動するという点で共通し，彼ら以外の一般商人たちで構成した「市場経済」世界とは一線を画した経済エリート集団と考えられる。この視角から見た 19 世紀以降のアジア社会・経済の姿は，ブローデルが描いたような「資本主義」ー「市場経済」ー「自給自足経済」という三層構造で解釈されるべきである。レイの解釈は，「ヨーロッパ」対「アジア」，「前近代」対「近代」というオリエンタリズム的思考を脱していないといわざるをえない。

注

1）　フェルナン・ブローデル（金森貞文訳）『歴史入門』太田出版，1995 年。

2）　安富歩『経済学の船出 ―― 創発の海へ ――』NTT 出版，2010 年，135-172 頁。安富は，現代社会での普遍的な関所を「商業金融資本主義」・「産業資本主義」・「情報流通資本主義」・「国家資本主義」の範疇に分ける。その「商業金融資本主義」の代表格が銀行，しかも少数の大銀行であったと指摘する。

3）　西村閑也，鈴木俊夫，赤川元章編著『国際銀行とアジア　1870～1913』慶応義塾大学出版会，2014 年。この最新の共同研究では，本稿で注目するイースタン・バンクは，第一次グローバリゼーション（1870 年～1913 年）期において，イギリスが金本位制で，その植民地を含むアジアが銀本位制であるという国際通貨・金融制度のもとで，その取引を支える「金融インフラストラクチャー」として捉えられている。

4）　杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房，1996 年，382-384 頁。

5）　Rajat Kanta Ray, “Asian Capital in the Age of European Domination : The Rise of the Bazaar, 1800-1914”, *Modern Asian Studies*, vol. 29, no. 3（1995）, pp. 449-554.

6）　水島司「イギリス植民地支配の拡張とインド人ネットワーク ―― インド人金融コミュニティーと東南アジア」秋田茂・水島司編『世界システムとネットワーク（現在南アジア 6)』東京大学出版会，2003 年，235-236 頁。

7）　西村，鈴木，赤川編著『国際銀行とアジア』。

8）　HSBC グループアーカイブズに保管されているマーカンタイル銀行の帳簿（Statements of General Balances）は，19 世紀後半のマーカンタイル銀行の活動内容を本・支店レヴェルから明

らかにできる貴重な資料である。さらに同行の取締役会議事録（Chartered Mercantile Bank Board of Directors, Minutes：以下，CMB, Minutes と略記）の分析は，アジア各地の銀行支店の日常業務をかなり明らかにすることを可能にする。それに加えて，マーカンタイル銀行の海外支店長が本店支配人宛に送った支店報告書（Half Year Reports from Branches：以下，CMB, Half Year Reports と略記）も併用するが，これは 1883 年 1 月付の報告書が残存するだけである。

9） 久末亮一『香港 ――「帝国の時代」のゲートウェイ』名古屋大学出版会，2012 年，1-23 頁。「ゲートウェイ」とは，これまで「中継港」，「自由港」，あるいは「居留地」と単純に表現されてきたネットワークの結節点の実情を再解釈する新しい歴史概念であると考えられる。

10） Maurice Collis, *Wayfoong : The Hongkong and Shanghai Banking Corporation*, London : Faber & Faber Publishers, 1965, p. 225.

11） 濱下武志『香港 ―― アジアのネットワーク都市』筑摩書房，1996 年。

12） 西村，鈴木，赤川編著『国際銀行とアジア』，序文 v。

13） 杉原薫「世界貿易史における「長期の 19 世紀」」『社会経済史学』第 79 巻第 3 号（2013 年），3-28 頁。

14） 杉原がいう「地域交易比率」とは，ある地域の総輸出における域内輸出の割合のことである。杉原は，ヨーロッパ，北アメリカ，ラテンアメリカ，アジア，オーストラレイシア，アフリカの 6 域内交易比率を推計する。

15） 杉原『アジア間貿易の形成と構造』；籠谷直人『アジア国際通商秩序と近代日本』名古屋大学出版会，2000 年。

16） ここで使用するのは，マーカンタイル銀行の帳簿（Statements of General Balances）である。1860 年から 1895 年までほぼ同じフォーマットで作成され，（1）貸借対照表（Balance Sheet），（2）本・支店ごとの資産負債表（Assets and Liabilities），（3）本店－支店勘定（Nominal Accounts）という 3 つの部門によって構成されている。（1）は年次株主総会で公表されるほぼ同じ内容となっている。（2）はマーカンタイル銀行の資産と負債が本店と各支店別に示されるものである。この資産負債表には，アジア各支店の預金残高，銀行券発行残高，手形割引，貸付等に関する詳しい情報が含まれる。これにより，アジア支店現地での銀行活動が正確に把握することができるのである。最後の（3）は，マーカンタイル銀行の本支店間での取引を示すものである。アジア各支店で行なわれた為替業務の大半がロンドン本店との振替によって行なわれたことを鑑み，銀行のアジア活動を全体的に把握するには，（2）と（3）を組み合わせて総合的に検討することが必要となる。詳しくは，北林雅志「19 世紀後半アジアにおけるイギリス植民地銀行の支店活動」『札幌学院商経論集』第 18 巻第 2 号（通巻 91 号）（2001 年），33-62 頁，をぜひとも参照していただきたい。

17） David Northrup, *Indentured Labor in the Age of Imperialism, 1834-1922*, Cambridge : Cambridge University Press, 1995, p. 32 ; 脇村孝平「インド人年季契約制は奴隷制の再来であったのか」樺山紘一ほか編『岩波講座　世界歴史 19　移動と移民 ―― 地域を結ぶダイナミズム ――』岩波書店，1999 年，157-161 頁。

18） 植村泰夫「植民地期インドネシアのプランテーション」加納啓良責任編集『岩波講座　東南アジア史 6　植民地経済の反映と凋落』岩波書店，2001 年，37-45 頁。

19） William F. Spalding, *Eastern Exchange Currency and Finance*, Third Edition, London : Sir Isaac Pitman & Sons, Ltd., 1920, pp. 232-233 ; 西村雄志「銀本位制から金本位制へ」西村閑也他編著『国際銀行とアジア』，371-376 頁。

20）Tirthankar Roy, *India in the World Economy : From Antiquity to the Present*, Cambridge : Cambridge University Press, 2012, p. 158.

21）角山栄「イギリス資本とインドの鉄道建設」『社会経済史学』第 38 巻第 5 号（1973 年），7–9 頁；渡辺昭一「19 世紀中葉期イギリスの対インド鉄道投資政策 —— 旧元利保証制度の展開と撤廃をめぐって」『土地制度史学』第 106 号（1985 年），1–19 頁。たとえば，最初の鉄道路線が 1853 年に大インド半島鉄道会社（Great Indian Peninsula Railway Company）によってボンベイ－ターナ間に建設され始め，さらに内陸のインド有数の棉花地帯であるベラールや中央州へ向けて伸張した。1855 年には，綿花地帯のスーラトからアフマダーバードを経由してボンベイへ通じるボンベイ・バローダ・中央インド鉄道（Bombay Baroda and Central India Railway）の建設も始まった。

22）B. R. Tomlinson, *The Economy of Modern India, 1860–1970*, Cambridge : Cambridge University Press, 1993, p. 123 ; Roy, *The Economic History of India*, pp. 272–274.

23）松下智『アッサム紅茶文化史』雄山閣出版，1999 年，231–234 頁。

24）北林雅志「チャータード・マーカンタイル銀行　1853–1892 年」西村，鈴木，赤川編『国際銀行とアジア』893–896 頁。

25）「本国費」の内訳は，イングランドでの巨額なインド債務の利子払い，インド省官僚の給与・年金の支払い，インド省の準備金，インド政庁・インド軍の維持費などで構成されていた。

26）Compton Mackenzie, *Realm of Silver : One Hundred Years of Banking in the East,* London : Routledge & Kegan Paul, 1954, pp. 47–48.

27）J. W. Maclellan, 'Banking in India and China : A Sketch（II）', *The Bankers' Insurance Managers' & Agents' Magazine*, vol. 55（1893）, p. 215.

28）ボンベイで多くの銀行や投機会社が設立され，その莫大な資金を商業・不動産部門に流し込み，ボンベイ・バブルを生み出した。Radhe Shyam Rungta, *The Rise of Business Corporations in India 1851–1900*, Cambridge : Cambridge University Press, 1970, pp. 72–93 ; Roy, *The Economic History of India*, p. 129.

29）Board Minute Book, 4th May 1886, 1st June 1886 and many others, Mercantile Bank History（mbhist）, no. 2308/1, HSBC Group Archives.

30）Marika Vicziany, "Bombay Merchants and Structural Changes in the Export Community 1850 to 1880", in Asiya Siddiqi, ed., *Trade and Finance in Colonial India 1750–1860*, Delhi : Oxford University Press, 1995, pp. 375–376.

31）小池賢治『経営代理制度論』アジア経済研究所，1979 年，173–220 頁。

32）Board Minute Book, 28th April 1886, 29th May 1888, 3th July 1888, 23rd October 1888, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

33）Z. H. Kour, *The History of Aden*. London : Frank Cass and Company Limited, 1981.

34）Michel Tuchscheer, "Coffee in the Red Sea Area from the Sixteenth to the Nineteenth Century," in William Gervase Clarence–Smith and Steven Topik, eds., *The Global Coffee Economy in Africa, Asia, and Latin America, 1500–1989*, Cambridge : Cambridge University Press, 2003, pp. 60–62.

35）Board Minute Book, 13th August 1886, 29th March 1887 and many others, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

36）Board Minute Book, 4th August 1886, 22nd March 1887 and many others, mbhist., no. 2308/1.

37） Asiya Siddiqi, “The Business World of Jamsetjee Jejeebhoy”, in Siddiqi, ed., *Trade and Finance in Colonial India*, pp. 186–217 ; Carl A. Trocki, *Opium, Empire and the Global Political Economy : A Study of the Asian Opium Trade 1750–1950*, London : Routledge, 1999, pp. 111–115.

38） Bombay Agency, Current Account Balances, 20th January 1875, K/8/2, no. 26, McLean Additional Papers, Hong Kong & Shanghai Banking Corporation History, HSBC Group Archives.

39） 払込資本金に関して，小池『経営代理制度論』，182–183 頁を参照。

40） Board Minute Book, 10th November 1886, 4th January 1887, 31th January 1888, 29th May 1888, 12th June 1889, 28th January 1890 and many others, mbhist., nos. 2308/1 and 2308/2, HSBC Group Archives.

41） H. L. D. Selvaratnam, “The Guarantee Shroffs, the Chettiars, and the Hongkong Bank in Ceylon”, in Frank H. H. King, *Eastern Banking : Essays in the History of The Hongkong and Shanghai Banking Corporation*, London : Athlone Press, 1983, p. 410.

42） Spalding, *Eastern Exchange Currency and Finance*, pp. 98–99.

43） “Sidelights on the Early History of the Firm（II）”, in *The Mercantile War Cry*, mbhist., HSBC Group Archives, p. 35.

44） Muirhead, *Crisis Banking in the East*, p. 160.

45） Board Minute Book, 29th December 1885, 5th & 26th January 1886, 19th April 1887, and many others, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

46） Board Minute Book, 10th November 1887, 20th August 1889, 10th June 1890, 10th February 1891 and so on, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

47） Half Year Reports from Branches, Calcutta, 23rd January 1883, mbhist., no. 436, HSBC Group Archives.

48） Board Minute Book, 11th January 1887, 10th January 1888, 12th January 1886 and many others, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

49） Roy, *The Economic History of India*, pp. 266–267.

50） Board Minute Book, 14th September 1886, 14th October 1886, 19th April 1887, and many others, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

51） Tomlinson *The Economy of Modern India,* p. 119 ; Tara Sethia, “The Rise of the Jute Manufacturing Industry in Colonial India : A Global Perspective”, *Journal of World History*, vol. 7, no. 1（1996）, pp. 71–99.

52） Board Minute Book, 13th July 1886, 15th July 1890 and so on, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

53） Board Minute Book, 14th December 1886, 20th September 1887 and many others, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

54） Board Minute Book, 6th & 30th March, 24th April 1888, 13th August 1889, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

55） Cheng Siok-Hwa, *The Rice Industry of Burma : 1852–1940*, Kuala Lumpur & Singapore : University of Malaya Press, 1968, pp. 10–12.

56） 斎藤照子「ビルマにおける米輸出経済の展開」加納啓良責任編集『岩波講座　東南アジア史 6 植民地経済の繁栄と凋落』岩波書店，2001 年，161–165 頁。

57） Board Minute Book, 13th April 1886, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

58）Siok-Hwa, *The Rice Industry of Burma*, p. 201.

59）Half Year Reports from Branches, Rangoon, 29th January 1883, mbhist., no. 436, HSBC Group Archives.

60）Board Minute Book, 17th November 1885, 9th March 1886, 13th September 1887, 27th September 1887, 10th January 1888 and others, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

61）Board Minute Book, 2nd February 1886, 16th February 1886, 2nd March 1886 and so many others, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

62）Rajeswary Ampalavanar Brown, *Capital and Entrepreneurship in South-East Asia*, London. : St. Martin's Press, 1994, p. 67

63）Brown, *Capital and Entrepreneurship in South-East Asia*, p. 70.

64）Anthony Webster, *Gentlemen Capitalists : British Imperialism in South East Asia 1770-1890*, London & New York : Tauris Academic Studies, 1998, pp. 225-229.

65）Board Minute Book, 9th February 1886, 29th March 1887, 22nd June 1887, 23rd October 1888 and others, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

66）コロンボ店に関して，Half Year Reports from Branches, Colombo, 4th January 1883, mbhist., no. 436, HSBC Group Archives を参照。

67）Michael Adas, "Immigrant Asian and the Economic Impact of European Imperialism : The Role of the South Indian Chettiars in British Burma", *Journal of Asian Studies*, vol. 33, no. 3（1974）, p. 386 ; 伊藤正二「インドの中小財閥の創成と現況 —— チェティアーの場合（1）」『アジア経済』第 5 巻第 11 号（1964 年），2-14 頁 ; David West Rudner, *Cast and Capitalism in Colonial India : The Nattukottai Chettiars*, Berkeley : University of California Press, 1994, pp. 53-88.

68）伊藤「インドの中小財閥の創成と現況」，12 頁。

69）Adas, "Immigrant Asian and the Economic Impact of European Imperialism", p. 398.

70）Tomotaka Kawamura, "Maritime Asian Trade and Colonization of Penang, c. 1786-1830", in Tsukasa Mizushima, George Bryan Souza and Dennis O. Flynn, eds., *Hinterlands and Commodities : Place, Space, Time and the Political Economic Development of Asia over the Long Eighteenth Century*, Leiden & Boston : Brill, 2015, pp. 145-165.

71）Loh Wei Leng, "Penang's Trade and Shipping in the Imperial Age", in Yeoh Seng Guan et al., eds., *Penang and its Region : The Story of an Asian Entrepôt*, Singapore : National University of Singapore, 2009, pp. 83-102.

72）Half Year Reports, Penang, mbhist., no. 436, HSBC Group Archives.

73）Mahadevan, "Pattern of Enterprise of Immigrant Enterpreneurs", p. 147.

74）Board Minute Book, 8th January 1889, 28th May 1890, 20th January 1891, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

75）Half Year Reports from Branches, 12th January 1883, Singapore, mbhist., no. 436, HSBC Group Archives.

76）Virunha, "From Regional Entrepôt to Malayan Port", pp. 111-113.

77）Board Minute Book, 14th May 1889, 23rd July 1889, 28th May 1890 and many others, mbhist., no. 2308/1, HSBC Group Archives.

78）Sunanda Sen, *Colonies and the Empire : India 1890-1914*, Calcutta : Orient Longman Limited, 1992.

要　旨

本稿が対象とする「イースタン・バンク」とは，19 世紀半ばのロンドン，インド，香港において設立されたアジア市場向けのイギリス系株式銀行群のことで，これまでも，そして現在でも，多くの歴史家の関心の的となっているイギリス国際銀行群の一類型である。イースタン・バンクは，1880 年代以降，植民地内部の商品流通や産業金融へ関与するようになったとはいえ，為替取引を主体とする国際的商品流通部門の割合が極めて高かったという特徴から「東洋為替銀行」と呼ばれていた。

本稿の目的は，イースタン・バンクの立地場所やそこでの営業実態を解明し，それが南アジアとその周辺地域経済圏の形成に果たした役割と影響を論及することである。具体的には，史資料の残存状況が比較的良好なマーカンタイル銀行を事例として取り上げる。

マーカンタイル銀行は，アジア各地でおもに対外貿易の金融を行なっていたが，1870 年代後半からの銀価格の下落による大きな為替差損を経験した。それへの対応策の一つが，インドや東南アジアでの割引・貸付業務の強化という「関所」ビジネスの多様化であった。こうした国際的商品流通部面以外での銀行業務は，植民地内部とその後背地の商品流通と生産過程への関与を意味し，イギリスの植民地支配体制の形成と確立を背景にして，非ヨーロッパ商人・金融業者との日常的な取引関係につながったのである。ここでの強調点は，イースタン・バンクの植民地金融ネットワークとアジア系有力商人の金融ネットワークとの相互の関わりというのが，「独占」を属性とする「関所資本主義」の世界で成立したということである。本稿では，「関所資本主義」という概念を援用しながら，イースタン・バンクの存在と「ヨーロッパとアジア」の出会いのあり方を再解釈し，イギリス国際銀行史研究の新境地を開拓する。

キーワード：イースタン・バンク，外国貿易金融，関所資本主義，イギリス帝国，南アジア

Abstract

This paper aims to provide historical knowledge on the pattern of development of South Asian regional economy in the late nineteenth century, with special reference of the British Eastern exchange banks including the Chartered Mercantile Bank of India, London, and China. And it also offers the ways in which they came to play a vital role in a rapid growth and formation of “Gateway capitalism” in South Asia under the impact of British imperial administration. The paper attempts to suggest a new perspective of the exchange banks for the understanding of British multinational banks.

From the late 1850s onwards, South Asia became included in the networks of the British Eastern exchange banks. After the opening of the Suez Canal, these banks in Asia rapidly increased their activities and began to play a key role, both in the expansion of international trade between Europe and Asia and in the rapidly growing intra-regional Asian trade. The well-established patterns of trade in that period were reflected by the geographical distribution of their offices in London and larger port-cities of Asia known as so-called “Gateways”. This paper explores the business of the Chartered Mercantile Bank in Bombay, Calcutta, Rangoon, and Penang, mainly on the basis of the bank’s relevant records held at the HSBC’s Group Archives, and contemporary sources that include important information of its key activities.

Keywords : Eastern Exchange Banks, International Trade Finance, Gateway Capitalism, British Empire, South Asia